

夢魔の精

3

砂漠にまた、猛々しい風が吹いた。

カバのような顔、全身に獣や鳥、魚といった形の無数の痣を持つ巨漢の悪魔、ヤベルが再び姿を見せたのだ。

「アシュラット！」

あの知的な声にして腐臭を放つ悪魔、アシュラットはそこにぼんやりとした、気だるそうな目で居た。

「近くにいるのだから大きな声を出すなよ。また援軍の要請か？」

横から甲高い声を出し答えたのは、コンニャクのような姿の、モルマ。

「いや。境無界の方は、ドンメルやケイムに声をかけたらすぐに大軍を引き連れて加勢に来た。だいぶん、盛り返せてる」

ヤベルは横柄に砂漠に巨体を横たえる。

「それは、神も天使もますます張り切るだろうて」

アシュラットは戦いの行方に興味があるのかないのか。表情だけでは推し量れない。

「翼を生やしてる悪魔ってのはよ。やっぱ駆け付けるのが早いよな。股間に変なモン生やしてる天使様もいるけどよ」

そう言いながら、モルマはまた例のオモチャ-----気高く美しい女の体に、男性器をつけられた天使----で遊んでいた。

「アシュラット。そのうちこの天使は、あいつらに引き渡すのか？」

「冗談じゃないぜ」

ヤベルの問いに、慌ててモルマの方が反応する。

「こんな面白いオモチャ、簡単に手放せるものかよ」

そう言いながら、懇願するような目でアシュラットの方を見る。

「せっかく楽しんでるんだ。飽きるまで触ってれば良い」

「有難いねえ～」

モルマは、上機嫌だ。

「一体どのぐらい、そいつで遊んでるつもりだ」

「なあに、五百年か千年ぐらいだろう」

「呆れた奴だ」

ヤベルは心底、深いため息をついてみせた。

悪魔の寿命などわからぬ。けれども人間よりは遥かにながいのだろう。しかし、それでも五百年や千年というのは決して短い時間ではないようだ。

「その後は？」

モルマの考えなど相手にせぬ、とばかりに、ヤベルは寝転がったまま顔をアシュラットに向ける。

「懐かしい故郷へ帰してやるさ」

アシュラットは、相変わらず感情の起伏の見えぬ声で答えた。

「こいつ、神界でどんな扱いを受けるのかな」

モルマは人形をいじるように天使の股間をつつく。けれどもこの白く美しい人形は、身を悶え

、肌を赤く染める。

「そりゃあ、歓待してくれるさ」

「そして憐れみを込めた目を向けてくれる」

ヤベルの言葉に、アシュラットが静かに付け加える。

「そして、どこかに匿われるかな」

「匿われる？」

ヤベルが、よくわからないといった目をする。

「そうさ。清廉潔白にして美しい神の世界に、こんな奇怪な存在などまともに置いておけるか」

アシュラットはさらに、自説に自信を込める。いや、口調も表情も変わらぬので、そうとは限らないが。

「かと言ってどこかに葬るわけにもいかない。ましてやここでのように、オモチャになどできない」

モルマの方をちらりと見る。モルマは、相変わらず天使の二種類の性器を触るのに夢中だ。

「いかにも、あの偽善者どものやりそうな事だぜ」

ますます天使の股間に頻繁に手を伸ばしながら、愉快そうだ。

「さて、オレはその偽善者どもの“正義の戦い”とやらに戻ろうか」

ヤベルが、横たえていた体を起こした。砂漠が、岩がざわめいた。

「おまえは本当に、戦いが好きな奴だ」

モルマは、振り向きもせず声をかけた。

「おまえの虐め好きには負けるさ」

ヤベルは憎まれ口を返しながら、また空間の裂け目へと消えていった。

後に残ったのは、アシュラットとヤベル、そしてオモチャになった天使-----だけではなかった。

そのすぐ傍の岩に、一人の老人の顔があった。それぞれが軍勢を率いる上級の悪魔たちが、この白く長い髪と髭を持つ老人の顔に気づいてはいなかったのだろうか？ 身を隠している訳ではない。まるで視界に入っているにもかかわらずまったく持たれぬ存在のように、老人の顔はそのすぐそばにあった。

「面白いことになっておるなあ-----」

ひとり呟いて岩から飛び降りた老人の顔には、人間の小指ほど小さな体もついていた。

菜穂は夫である幸次の様子を注意深く見守った。誰が見ても明らかなほど、動揺の色を浮かべている。

言葉は、出てこなかった。何と云えば良いのか、迷っている風にも見えるが、初めから諦めているようでもある。

菜穂も自分が何か言うべきなのかを考えるが、言いだせない。いや、一体何を言えば良いというのか。

（美莉が妊娠している。相手は誰だかわからない）

母親である菜穂もまた、それ以上の事はわからないでいる。

夫婦の間に、重苦しい沈黙が流れ続けた。二十年近く連れ添えばそれなりの山や谷もあったが、これ程までに重い空気になるのは始めてだ。けれども菜穂はこの沈黙がずっと続けば良い、とさえ心のどこかでは考えていた。それだけこの問題はどうか解決すれば良いのか、いやどこへ向かっても絶望的なゴールしかないように思えたからだ。

「それで、相手は・・・」

ようやく幸次の口から放たれた言葉だった。菜穂は内心（やっぱり・・・）と思う。

「それが、美莉はまったく身に覚えが無いって」

自分で言ってもおかしなセリフだと菜穂は思う。しかしそれしか、自分にもわからない。

「そんな馬鹿な事があるか！」

幸次は声を荒げた。

「私だってそう思うわよ。でも本人が知らないって言ってるんだから、しゅがないじゃないのよ！」

幸次の言葉に自分もムキになって反論した後に、菜穂は二階の子どもたちの部屋まで響いていないかと、心配になる。

「身に覚えがないのに、どうしてそんな事になるんだ」

「わかりませんよ。私だって」

一向に気を使わず、ただ怒りをままくし立てる夫に、菜穂は苛立ちを覚える。

「嘘をついてるんだよ」

相変わらず幸次の方は、感情をむき出しにしてくる。

「美莉が嘘をついてるって言うんですか」

菜穂も心の奥では、娘が隠しごとをしているのだと思っている。何もないのに子どもができるはずなど、無いのだから。けれども今反論しているのは、美莉への信頼ではなくむしろ、夫を憎む気持ちによるものだ。

「とにかく、相手が誰だか聞くんだ」

幸次はさっきと同じ言葉を繰り返した。

「私に聞けっていうんですね？」

「当たり前だ。母親なんだから」

「あなたは父親でしょ？」

「妊娠なんて、男親が関わる事じゃないじゃないか」

嘘だ。仮に普通の年頃で、当たり前の際を経て結婚をしてからであれば、幸次は我先にと孫の誕生の準備を急ぐだろう。

「子どもは、どうするんですか？」

「高校生が、産めるはずがないじゃないか」

やはり、当たり前の際が返ってきた。そのすべての段取りは、自分が、そして美莉自信がするしかないのだろう。

(頼りない男・・・)

菜穂は幸次の事を、そう思った。隣のベッドで寝ている幸次の背は、そむけられていた。菜穂が寝室に入ってきた時、すでにその体勢だった。

思えばこれまで、さして大きなトラブルがない結婚生活だった。役所勤めの幸次は民間企業ほど時勢に流される訳ではないし、我も強い方では無かった。菜穂も極端な夢や希望を抱くような性格ではなかったから、大きく衝突するような事はまず無かった。しいて言えば和やかな家族をつくれれば良い、というのがお互いの希望だったが、美莉も潤那も手を焼かせるような子どもでは無かったから、そこでも目立った波風が立つ事は無かった。

(だから気づかなかったのだ)

そう菜穂は思った。美莉の妊娠の事実を知った時の幸次の取り乱しかたは、自分が当事者でなければ、あまりの無様さに大笑いしてしまっただろう。

けれどもこの男は夫であり、父親なのだ。

菜穂は背をそむけず、仰向けになったまま自分のベッドから夫の背中に目をやった。薄い背中だと思った。よくこんな男の背中に二十年近くも着いてきたものだと、ため息が出た。

それは鳴き声なのか？ いやあらゆる人間の常識を無くせば、そのカラスの口から発せられるのが“言語”である事は明白だろう。

けれどもその意味を理解するのは、無理かもしれない。カラスは今だけでも七つの種類の言語を操っている。そしてそれはさらに、増え続けている。

このカラスがもし人間界に舞い降りれば、あらゆる言語学者は失職し、国際会議などに複数の通訳がいるという光景は、無くなるだろう。

しかしこのカラスは、一体何を叫びながら光の存在たちを殺戮しているのだろうか？ これは予想でしかないが、恐らくは悪辣な誹謗、あるいは罵り、もしくは野卑な侮辱だろう。何しろこの多彩な言語を操るカラスこそ、“羽を持つ悪魔”の一人、ケイムなのだから。

*

「ケイム、天使の数が増えて来ているぞ。援軍が来たらしい」

その野太い声は、聞き覚えがある。この空虚な空間は震えも壊れもしないが、周囲を破壊する事しか考えていない男。巨大な二足歩行のカバ。体中に人の顔のような模様を持つ悪魔、ヤベルだった。

「& \$ \$ == ! ! % %」

「俺にわかるように喋れ！」

ケイムの繰り出した返事は、ヤベルの知らぬ言葉だったらしい。カラスの顔が、嫌らしく歪む。

「すまんすまん。知ってるそばかり思っていた」

ケイムは口を曲げた。好機とばかりに剣を振り上げてきた天使の胴を掴むと、空き缶でも握りつぶすように砕いた。天使の清らかな血が、虚空へと飛び散る。

「わざとらしいんだよ、おのれは。知識をひけらかしおって」

ケイムはヤベルの怒りなどどこ吹く風。天使たちの攻撃を翼を広げ、押し返す。

「おまえがいない間にずいぶん片づけたのにな。まるで連れて来たみたいだ」

「何だと！」

悪魔たちは互いを罵り合いながら、共通の敵である天使たちに牙を剥く。これが悪魔の戦いなのか？ 協力などという言葉は、まるで無い。

「聞き捨てならぬな、ケイム。おまえが仕留めた天使はわずか二二二体。オレは二二八体だ」二人の後方から、澄ました声が聞こえてくる。六色に輝く翅は、ゆらめくたびに傍に寄って来る天使たちの四肢を引きちぎっている。

「楽をするな、ドンメル！」

ヤベルが怒鳴る。その腕組みをした孔雀はすました顔で、ひとつも動じる気配はない。

「こんな下級天使にいちいち体を動かす必要など無いのだ」

この腕組みした孔雀こそが、もう一人の“羽を持つ悪魔”ドンメルなのだ。

「オレは天使ごときの相手をするためにいちいち手をほどく事はない。四七七七日、この手はとかれてはいない」

ドンメルもまた、強烈なエゴの塊のようだ。いやそれだからこそ、悪魔だと言えるのだろうか。

「そうも言っておれんようだぞ」

ケイムの目が、虚空の遠くを見据えていた。

「どうしたんだ？」

「凄いスピードで近づいてくる光が九つ。天使長クラスだ」

ケイムとヤベルの話す後ろで、突然ドンメルが反吐を吐いた。

「どうしたんだ？」

「オレの目にもあの光が入って来たんだよ。気色悪い」

「 “ \$ \$? ? < < & 」

ドンメルが反吐を吐き続けるのを見ながら、またケイムが見知らぬ言葉を使った。その愉快そうな顔から、たぶんドンメルの苦しむ様子を揶揄しているのだろう。

「フンッ！」

ケイムのカラスの顔の横を、突風が吹きぬけた。見ると羽を持つ悪魔たちのやり取りになど耳を貸さず、ヤベルが虚空に向かい一発、空拳を放っていた。

「何をやっていやがる？」

顔の横を風が流れた事に気分を害したのか、ケイムが睨みつけた。

「確認しろ。光は八つになったはずだ」

ケイムの怒りなど意に介さず、ヤベルは自分の言いたい事だけを言う。

「命令するんじゃねえよ」

全身の毛を逆立てたヤベルの目には、遥か彼方で八つに減った光が映っていた。

ここは、“境無界”と言われる場所。天界と悪魔界のちょうど真ん中にある空間。白と黒とが交われば灰色になるが、光と闇が交われば果たしてどうなるのか？ それは虚空だった。ただ何も無い“無”の空間。そこで神と悪魔は絶えず戦いを繰り返している。始まりだけがあり、終わりは無い、永遠の戦い。

*

「モルマ、貴様たまには境無界にでも言ったらどうなんだ？」

捕らわれた哀れな天使のヴァギナとペニスをいじくり遊び続けるモルマに向かい、アシュラットは相変わらず無表情のまま言った。

「行きたいなら、おまえが行けよ」

モルマは手を止める事なく、アシュラットに返事をかえす。

「行くさ。けれどもまだ天使たちだけだろう？ 神が出て来たあたりでな」

「ひよー、大きく出たもんだ。神が戦にやって来るなんて、何百年ぶりだろう？」

「さあな。私だって覚えてはいない」

アシュラットは天使の局部で遊び続けるモルマの様子を、頬杖ついて見つめている。

「こんな天使を救い出すために、神が動くものかね？」

「動くさ。神界の大切な住人が捕えられているのだから」

「おおー、やだやだ。何たる偽善」

モルマは美しい女天使に付けられたペニスを指に絡めて、ぐるぐる回す。

「ヤベルたちの頑張り次第だな」

「オレは境無界なんかには行かないぜ。無意味な行動は嫌いなんだ」

「おまえは時々、知的な事を言うな」

アシュラットはおかしそうに笑った。モルマにとって境無界での神や天使の戦いとは、天使を使った半自慰行為以下のものなのだろうか。

名倉家の食卓に、家族が揃う事はほとんど無くなっていた。父である幸次は朝はさっさと会社に出かけ、夜は以前にも増して遅く帰る日が多くなった。菜穂は夕食の準備をテーブルにしておき、ラップをかけて置いておくだけだった。食べたければ自分でレンジに入れてどうぞ、という訳だ。何とかしようという意志が幸次には全く見えない。菜穂も早々と家族の生活を円滑にするための努力は、止めにした。

当事者である美莉にしても食事を済ませるとさっさと自分の部屋に戻って行ってしまふ。弟の潤那は何も知らないため最初は不審がっていたが、「お姉ちゃんは病気なのよ」と菜穂が説明すると、余計な事は言わなくなった。もっとも何の病気なのか。治るのかなどをしつこく菜穂に尋ねてくる時期もあったが、「女の子のデリケートな病気だから」と言うところからはあまり何も言わなくなった。姉思いの、良い弟なのだ。

母とも弟とも一緒に居たくないと思っているはずの美莉は食卓ではあまり食べなかったが、夜中にこっそりと冷蔵庫の中を漁りに行っていたようだ。妊娠をしているため、食欲はわくのだろう。それを知った菜穂は夜食のように毎晩別の食事を準備し、美莉の部屋に差し入れるようになった。会話も無く、ドアを少し開け置いておくだけ。美莉も母の気持ちを理解してか、それとも食欲を抑えきれないのか、朝にはきれいになった器だけが、返されていた。菜穂はそれを繰り返すごとに、美莉が現実に身ごもっている事実を再確認する事になるので、複雑な気分ではあるのだが。

*

けれども、こんな状態を続けていく訳にはいかないのは、菜穂は十分にわかっていた。美莉に中絶手術を受けさせねば、事態はいつそう悪くなってしまう。

家庭内でのギクシャク、夫の幸次との関係は、もうどうでも良くなっていた。ひとつのほころびにより、ここまで呆気なく破綻するような男だとは思ってもいなかった。あまりにも脆い夫に、心底愛想を尽かしていたのだ。だから美莉の事が片付いたら、次は自分。そんな思いもあった。自分で生活をしていく事も、多少模索し始めていた。子どもたちがいるので生活の目途が立ってもすぐに別れられるとは思わないが、この短期間で菜穂の心は幸次の元から大きく離れていた。

また、検診の日がやって来た。美莉はいつものように問題が発見されるのを望んでいたが、医師によると経過は順調らしい。

同時に美莉は中絶の申し出を常に心に秘めながら、通院をしている。しかしそれがいつまでたっても言葉となって出ないのは、なぜなのか？

美莉にも良くわからない。自分の体が傷つくという事に対する恐れだけではないような気がする。だからこそ、美莉は問題が見つかるのを望んでいたのだ。そうであれば、止むを得なく堕ろす、という理由になるからだ。では美莉の中絶への抵抗は、ひとつの生命を自らの意思により消す、という事に対する罪悪感によるものだけかと言えば、そうでもない気がして、このあたりが自分でも良くわからない。

わからないと言えば、美莉自身も捉えどころがない最大の事は、自分を妊娠させたのが誰かという事だ。こればかりは病院ではわからないし、誰も教えてはくれない。

学校では以前のように思い切り振るまえないし、調子が悪い日が出るなど日常生活にも支障が出てきている。家族の雰囲気が悪くなってきているのも感じていたが、それを慮る余裕など、今はとても無かった。今のうちに子どもを堕ろすという選択が、どう考えても最良だ。けれどもそこに何かのひっかかりを覚えながら、美莉は再び検診の日を迎えた。

「良好ですよ」

担当医の言葉は、望んでいるものとはまたもや違っていた。けれどもやはりどこかで安心している自分を、感じている。

母にどう説明しようか？

昨晚遅くに「明日検診でしょう？」と様子を見に来た母には、ただ頷いただけだった。そして今朝。見送りに出た母だが、当然の事だが学校帰りに向かう病院の方を意識していたに違いない。

言葉には出されていないが美莉には、母が心の中で何度も（中絶を決めたんでしょう？）と問いかけているように思っていた。

母の心が父のもとからほとんど離れてしまっている事など知らない美莉は、自分がその決断さえすれば多少時間はかかっても、また完全では無くても、家族が元通りになるのに、という思いもある。

（意味も無く答えを先延ばしにしている自分がすべて悪いのだ）

美莉はそう自分を責める。けれどもすべての災いを招いているはずの自分のお腹が、そう思えば思うほど暖かくなっていき、今の自分を癒してくれる唯一の場所である事も、美莉には不思議に感じられていた。

美莉は学校帰りに遠回りをして立ち寄った公園で、制服から普段着に着替えた。制服姿のまま病院になど行く訳にはいかないからだ。

そして向かう時もそうだが、検診後も美莉はこれまでの人生で経験した事がないほど、周囲を気にしながら歩く。何度も息がつまりそうになる、辛い道のりだ。

病院に入る時、出る時、そして待合室で。美莉はただひたすら怯えた。誰かに見られでもしたら、すぐに噂が広がってしまう。そうなれば家族どころか生活のすべてが壊れてしまう事は、容易に想像できたからだ。

幸いな事に、知り合いらしき相手とはこれまで出会っていない。けれども油断はできない。もう病院からずいぶん遠ざかったけれど、美莉は周囲を見回しながら、顔を伏せるようにして歩いた。そんな美莉の前に、奇妙な老人の姿があった。一刻も早く家に着きたい美莉だったが、その老人の風変わりな様子に思わず美莉は、視線を止めた。

美莉は何度も瞬きをして、その老人の姿を見返した。ああ、やっぱり見間違いだったんだと思うと、またもやそう見えてしまう。おかしいと思い瞬きをすると、やはりそうでもない。

長い白髪 of 老人は、小指ほどの体の大きさしかないように見えるのだ。しかしもう一度よく見ると、顔と体のバランスが少し悪いだけで、どこにでも居る小柄な老人に過ぎない。

美莉は自分の置かれた特殊な状況が幻覚を見せているのか、あるいはノイローゼ気味なのだと感じた。いよいよ結論を出さねばならない。いや結論はもう決まっているではないか？ 産める訳がないのだ。またこんな誰が父親かもわからないような奇怪な子を産む理由も、あるはずがない。

そう考えている美莉と、老人の目が不意に交錯した。

おそらく美莉が変な目で見っていたのに気づいたのだろう。美莉は慌てて頭を下げ、非礼を詫びた。

その様子を見ると老人はニコリと笑い、会釈をした。怒られるのではないかと考えていた美莉は、ホッと胸を撫で下ろした。

「不憫なもんじゃなあ」

そこに突然、そんな言葉が聞こえてきた。周りにいるのはこの老人だけ。とすればこの老人の声に違いないのだが、どこかおかしかった。その声は耳では無く、頭の中に直接響いてきたような気がしたからだ。

(一体、何が・・・)

“不憫”という老人の言葉は、一体何に向けられたものなのか？

そんな美莉の疑問にまるで呼応するかのよう、またもや老人の声が響いてくる。

「弟の子を、身籠るとはな」

美莉は周囲を見回した。

老人と自分以外は、やはり誰もいない。聞き間違いだろうか？

頭の中にまるで幾重もの霧がかかり、混乱しているその時、老人が振り向いた。ほんの一瞬だが、美莉と再び目が合った。

まさにその時-----老人は笑ったのだ。まるで(可哀想な娘だ)と言っているかのように。憐れみとも皮肉ともつかない形相で、美莉を見たのだ。

(弟の、子ども・・・)

美莉の頭の中で、無邪気な潤那の顔が、醜く歪んでいくのを感じた。